

三語句動詞における意味形成原理とその習得に関する研究

○中村俊佑

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程二年

1 句動詞研究の概観と本研究の位置づけ

句動詞(phrasal verbs)とは、「動詞と不変化詞(空間詞)が結びつき、1つの動詞として機能するもの」と定義され(Biber et al, 1999; Bolinger, 1971; Fraser, 1976; Celce-Murcia&Lasen-Freeman,1999;田中他,2005; 森本,2009)、統語的な観点から以下の6つのタイプに分類できる。

- (1) 自動詞+副詞
- (2) 自動詞+前置詞
- (3) 自動詞+副詞+前置詞
- (4) 他動詞+副詞
- (5) 他動詞+前置詞
- (6) 他動詞+副詞+前置詞

このうち、本研究で扱うのは、(3)と(6)の形のものである。

2 三語句動詞の定義

[動詞+副詞+前置詞]または、[動詞]+目的語+[副詞+前置詞]において、前置詞を除いた場合、除かない場合との意味的差異が明瞭になる場合を三語句動詞と呼ぶ。

- (1) He came up.
(彼はやって来た。)
- (2) He came up to me.
(彼は私のところにやって来た)
- (3) a. He came up to all our expectations.
(彼は私達の全ての期待に応えた)
b. He came up for re-election.
(彼は次の再選挙に出馬した)
c. He came up with an idea.
(彼はアイディアを思いついた)

上記の例では、(2)は[動詞+副詞+前置詞]であるが、{ to me }の前置詞句を除いたとき、(1)と意味的に同義である。しかし、(3)では、come up to~で「~に応える」、come up for~で「~に出馬する」で、come up with~は「~を思いつく」となっており、形式と意味が直ちに結びつきにくいいため、三語句動詞と呼ぶ。

ただし、本研究の目的は、(2)と(3)を区別することにあるのではなく、(3)のようなイディオム性の高い「三語句動詞」であっても、(2)のような字義的解釈の可能な物理的用法を持つものからの意味的な拡張によって、応用可能性を持つことを示すことである。

3 三語句動詞を学ぶ意義

これまで、三語句動詞はイディオム・慣用表現としての扱いがなされ、学習の対象にならず、形成原理や習得に関する十分な研究もなされてこなかった。慣用表現に関しては、Langaker(2005)で指摘されているように、①分析不可能で、話者の頭の中で定着しているもの(fixed expressions)、②分析可能であり、構成要素から意味を導きだすことができ、新しい表現(novel expressions)を作り出すことが可能であるもの、の二種類あることが指摘されている。以下の二例をあげよう。

- (4) Kick the bucket. (くたばれ)
- (5) I love you. (僕は君のことが大好きだ)

(4)も(5)もこれらを発話する際、話者の頭のなかで構成要素を組み合わせて考えることなしに、発話でき

る表現であるゆえ、両者とも慣用表現としての要素が高いように思える。しかし、両者には大きな差がある。つまり、(4)に関しては、[Kick]と[the bucket]に分けて意味を融合させても、「くたばれ」という意味にはならない(通時的な背景を探らなければならない)が、(5)に関しては、[I]と[love]と[you]を合成することにより、意味の創出は可能である。こうした(5)のような用例を分析可能性(analyzability)があるという。これまで、慣用表現にはこうした①,②のこのことの区別がなされてこなかったが、多くの学校英語で学習の対象になっている慣用表現とされる表現は②のものである。こうした分析可能性から、学習可能性や教授可能性、そして学習者自身が新たな表現を自ら創出していく応用可能性にまで広げることが可能である。本論文では三語句動詞は分析可能性を持つという前提で議論を進める。なお、三語句動詞を学ぶことによって以下の三点の教育的効果が期待できる。

- (i) 三語句動詞で用いられる語は動詞・副詞・前置詞の大半は基本語であり、品詞ごとに基本語の意味拡張の原理を学ぶことができる。
- (ii) 三語句動詞特有の形成原理を学ぶことにより、自ら基本語を柔軟に使いこなし、新しい表現も自ら創出可能となる。
- (iii) 三語句動詞特有の多義性にも対応でき、場面や状況に応じた解釈・発話が可能となる。

4 三語句動詞の意味拡張のタイプ

三語句動詞の意味拡張の理由として、以下のタイプ A,B が考えられる。

《タイプ A》前置詞の対象の性質によって、移動・動作の表現が抽象的な状態変化を示す場合。
《タイプ B》二語の句動詞で示される対象を前置詞以下で情報追加する場合。

4.1 タイプ A: 抽象的な状態変化

二語の句動詞で物理的な移動や動作を表したものが[前置詞+対象語]を取ることによって、対象語の性質により意味が抽象化し、抽象的な状態変化を表す場合がある。

- (6) She went in.
(彼女は入って行った)
- (7) She went in for sweets.
(彼女はスイーツが好きだ)
- (8) He came down.
(彼は転んだ)
- (9) He came down with a fever.
(彼は熱病にかかった)

(6), (8)は物理的移動であるが、対象語の性質により、「～を好む」や「(病気等に)かかる」といった状態変化を示し、抽象化された意味となる。

4.2 タイプ B: 前置詞以下で情報追加する場合

ここでは、二語の句動詞において足りない動作対象を情報追加することで意味が抽象化する例をあげる。

- (10) He looked up.
(彼は見上げた)
- (11) He looked up to the teacher.
(彼は先生を尊敬した)

(10)は物理的移動であるが、the teacher という look up する対象を情報追加することによって、(11)の「尊敬する」といった抽象化された意味となる。ただし、タイプ A に比べ、抽象度や理解困難度は低い。

5 三語句動詞の意味形成原理

5.1 三語句動詞の意味形成原理

《分類Ⅰ》動詞＋[副詞＋前置詞]
《分類Ⅱ》[動詞＋副詞]＋前置詞

5.1.1 動詞＋[副詞＋前置詞]の場合

《分類Ⅰ》に関しては、[副詞＋前置詞]の結合度が高く、動詞が付加的に結合し、意味が抽象化したものである。[副詞＋前置詞]に関しては、以下の2例に限られている。なお、ここではそれぞれの語を説明する際にコア理論を参考にする(田中、1987,1990,2006 他)。

(12) away from～, out of～

この句動詞の理解の方法として以下のように記述できる。なお、この分類は二語の句動詞の分類の際に用いた先行研究を参照した(田中・川出、1989)。

[副詞＋前置詞]の状態になる、する、保持する

(13) Keep away from me. (私に近づかないで)

(13)' Keep [away from me].

(13)は(13)'のように分析でき、コア理論(田中、2003 に依拠する)を用いて記述すると、以下のようになる。

(13)" 〈私(という起点)から離れた状態を保つ〉

このように、keep away fromに「～に近づかない」の意味があるのではなく、(13)'のように原理を解釈した結果として(13)"のような訳出が可能である。

5.1.2 [動詞＋副詞]＋前置詞の場合

《分類Ⅱ》に関しては、[動詞＋副詞]の結合度が高く、前置詞が付加的に結合し、意味が抽象化したものである。

この分類における句動詞を考えるにあたって、以下の原理によって解釈可能である。

a. {前置詞～}の状態、[動詞＋副詞]する
b. [前置詞～]である状態を、[動詞＋副詞]する、させる、保持する
c. [動詞＋副詞]して、{前置詞～}の状態になる

5.1.2.1 (a) {前置詞～}の状態、[動詞＋副詞]する

(14) a. I can't come up with any more ideas now.

(今はこれ以上、アイデアが思い浮かばない)

b. I can't [come up]←{with any more ideas}now.

come up with～は、多くの学習参考書・問題集などに記載のある頻出表現だが、語義は「～を思いつく」と記載がある。では、なぜ、come と up と with でこの語義が発生するのだろうか。この原理を利用すると、(14a)は(14b)のように分析可能である(矢印は修飾関係を示す)。コア理論を利用し、come、up、withの語のコアを図式融合させながら記述すると以下の(14a)'になる。

(14) a' 〈多くの考えを伴った状態で私(の考え)が浮上する〉

ここでは、前置詞句を除いて、I can't come up.とした場合と語義がかなり異なっている。{with～}という前置詞句を取ることで抽象的な変化を記述でき、さらに、主語であるIをそのまま解釈しては意味が成り立たないことから、メトニミー的解釈を必要とし、三語句動詞としての慣用度が高い表現である。また、以

下のように、動詞が他動詞のものであっても、三語句動詞となることによって、自動詞のように使われる例もある。

(15) a. The man made away with my bag.

(その男は私の鞆を持ち逃げした)

b. The man [made (himself)away]←{with my bag}.

make のコアは〈何かが姿・形を変えて何かになる〉ということであるが、「作られるもの（産物）」が必要である。ここで、make が他動詞なのにも関わらず、目的語を取らない理由は、作用対象は主語である the man であるからで、(15b)のようになる。

(15)′ The man made [himself away].→make (X,Y)

X make Y において、X は The man であり、Y は[himself away]である。Y の[]は小さな節(small clause)とみなし、ここでは、BE がそのつなぎの役割を担っている。つまり、Y は He is away (from his place). ということであり、make によって、〈その場から自分が離れるという状況への変化（産物）〉を示す。これらを総合して、以下のように記述できる。

(16) 〈私の鞆を伴った状態で自分がその場から離れる〉

(16)のように解釈できて初めて「持ち逃げする」という状況が創出できるのであり、make away with〜がその語義を有しているわけではない。

5. 1. 2. 2 [前置詞〜]である状態を、[動詞+副詞]する、させる、保持する

(17) Australia did away with the death penalty.

(オーストラリアは死刑制度を廃止した)

(17)′ Australia [did away] [with the death penalty.]

do away with〜も頻出の表現で「〜を廃止する」の意味で記載されていることが多いが、(4a)のように解釈すると、〈オーストラリアは死刑制度を伴った状態でその場から離れる〉となり、「廃止する」の意味が創出できず、解釈不能となるが、do が他動詞であることを踏まえ、(17)′のように解釈し直して、記述すると、以下のようになる。

(18) 〈オーストラリアは死刑制度とともにある状態を切り離す〉

(18)のように解釈できれば、「廃止する」の意味が創出できる。つまり、これまでの統語論的な解釈では、修飾語と見なされてきた前置詞句が[動詞+副詞]という句動詞の動作対象（目的語）として働いている。このことは、以下の例(19)のように二語句動詞でも見られる。

(19) He broke with the tradition. (彼は伝統を捨てた)

(19)′ He [broke] [with the tradition].

(19)で with〜を修飾語と見なすと、〈伝統を伴いながら、何かを壊した〉となり、「伝統を捨てた」の意味が創出できない。しかし、[with〜]の前置詞句を break の動作対象と見なすと、以下のように記述可能である。

(20)′ 〈彼は伝統とともにある状態を壊した〉

また、(15)とは逆に、本来、自動詞であるはずの動詞が三語句動詞になることによって、(21)のように、他動詞として扱われることがある。

(21) a. I went back on a promise to my parents.

(私は親の期待を裏切った)

b. I [went back](V)[on a promise](O)to my parents.

これを意味形成原理およびコア理論に従って記述すると、以下の(21)'のようになる。

(21)' 〈約束に接触した状態を後ろへ移動させる〉

(21)'の解釈から、「～を裏切る」の意味が創出される。

このように、三語句動詞となることによって、(i) 他動詞が自動詞化する(もしくは、自動詞が他動詞化する) (Fraser,1976でも指摘)、(ii) [動詞+副詞]で動詞のような働きをし、それ自体で自動詞・他動詞となる、(iii) 前置詞句は修飾語となるのみではなく、動作対象(目的語)としても働くという特徴がある。

(C)' [前置詞]で示された状態で何(誰)かを副詞で示される状態にする

ここでは、動詞+目的語+副詞+前置詞のように、動詞の後に動詞の対象語(目的語)が挿入されるもしくは、挿入され得ると考え省略されているものを扱う。例えば、(22)の例文を見てみたい。

(22) Jim put his success down to hard work.
(成功したのは一生懸命勉強したからだと考えている)

(22)を意味形成原理およびコア理論を用いて記述すると、以下の(22)'のようになる。

(22)' 〈ジムが成功した理由を一生懸命勉強に向き合ったからだということにする〉

また、以下の(23)の場合は動詞の目的語にある省略を明示しない場合である。

(23) We must make up for lost time.
(失った時間の埋め合わせをしなければならない)
[i.e. We must make (something) up←{ for lost time } .]

(23)を意味形成原理およびコア理論を用いて記述すると、以下の(23)'のようになる。

(23)' 〈私達が失った時間に向かって何かを仕上げる〉

(23)'のように解釈することで、「～の埋め合わせをする」という語義が生まれる。

ただし、三語句動詞によっては、以下のように、同じ三語句動詞であっても、取りうる対象語の性質やコンテキストによって、原理(b),(c)双方を用いることもある。

(15) The man made away with my bag.
(その男はバッグを持ち逃げした)
[i.e., The man [X] made (himself [Y]) away {with my bag.}] →X=Y

(24) He made away with his partner's money.
(彼は自分の相棒の金を使い果たしてしまった)
[i.e. He made away [with his partner's money].]

5.1.2.3 [動詞+副詞]して、{前置詞～}の状態になる

(25) Can I come in on your plan?
(あなたの計画に参加しても良いですか)

(25)' Can I come in→{on your plan}?

この例では、[動詞+副詞]という動作結果が、{前置詞句}で示される用例である。これを踏まえると、

(25)'' 〈プランの中に入って行って、その結果、プランに接触する状態になる〉

と解釈でき、「参加する」という意味が創出される。
類例としては、以下の(26),(27)が挙げられる。

(26) She broke out in loud laughter.

(彼女は突然、大笑いした)

(26)' She broke out → { in loud laughter }.

(26)" 〈彼女は（静寂という）雰囲気や断って、大笑いという状態のなかに入っている〉

(27) She caught up with her friend.

(彼女は友達に追いついた)

(27)' She caught up → { with her friend }.

(27)" 〈彼女は友達のところまで近づいていって、友達とともにいる状態になる〉

5.2 解釈の困難な表現

三語句動詞としての慣用度が高く、解釈が困難な事例として以下の三例が挙げられる。

(28) I ran out of money.

(私はお金がなくなってしまった)

(28)の表現が意味するものを忠実に表現すると、(28)'のような表現となる。つまり、〈私のお金が外に流れるように出て行く〉というところから、「～が足りなくなる」の意味が生まれる。

(28)' My money ran out.

しかし、表現としては(28)'の用いられる状況は限定的であり、(28)が一般的である。行為の主体である人に焦点があたり、「I」はここでは、「My money」のことを示すメトニミー的な表現方法である。

類例としては以下の二点がある。(29)は一般的な表現であるが、(29)'になると限定的な表現となり、(30)も一般的な表現だが、(30)'になると容認不可能な文となる。

(29) I came up with ideas.

(私は考えが思いついた)

(29)' My ideas came up at the meeting.

(30) I broke out in a rash.

(私は湿疹ができた)

(30)' * My rash broke out.

5.3 V+副詞+前置詞による意味系統分類

BNC のコーパスで調査を行ったところ、V+副詞の取りうる前置詞 α -は限定的であることがわかった。つまり、二語の句動詞によって取りうる前置詞のマトリックスが以下のように記述できる。

句動詞	前置詞 (α -)
V+along	with,
V+away	from, with
V+back	for,
V+down	for, in, on, to, with
V+in	at, for, on, with
V+off	with
V+on	in, to
V+out	at, for, in, of, on, to, with
V+over	to, with
V+through	to, with
V+up	by, in, on, to, with

6 三語句動詞習得調査

これまで述べてきた意味形成原理を精緻化させるために、学習者の習得しづらい部分を抽出する調査を、大学生を対象に行った。

6.0 三語句動詞の習得が困難である背景

三語句動詞が習得困難であると想定される背景として以下の7点が挙げられる。

- (1) 訳語対応の学習法では、語を想定できず、新たな表現を学習者が創造していく応用可能性もない。
- (2) 基本動詞、副詞、前置詞のコアと意味拡張の原理を知らなければ、理解できない。
- (3) 安易な受験指導などにおいて、「理解」に時間を要するため、最短距離である「暗記」に帰着しやすい。
- (4) 多くの三語句動詞には多義性が伴う。
- (5) 多くの三語句動詞は1語の動詞に言い換えることができず、学習者にとっては、三語句動詞を用いる動機づけが弱い。
- (6) 三語句動詞のなかでも、動詞・副詞・前置詞ごとに抽象度が異なり、習得が困難な変数が多くなる。
- (7) 三語句動詞特有の形成原理があり、統語的には処理できないものが存在する。

6.1 予備調査の実施

本調査における調査紙作成のための問題を選定するため、大学生54名を対象に以下のような調査紙を50問出題した。尺度として、下線部の三語句動詞について、(a)日本語訳と下線部の表現に対する対応度(意味的明瞭性: transparency)がどの程度かを6段階で評価(数字が大きいほど対応度が高い)、(b)下線部の表現に関する認知度はどの程度か(経験度: familiarity)の二点を調査した。

(調査票例) He never gives up on his students.

【give up on～の日本語訳：～を見捨てる】

(a) 訳語からの連想：1-----2-----3-----4-----5-----6

(b) 下線部の句動詞に関して：

A: 見たことがある ・ B: 見たことがない

予備調査の結果、以下の表1のように6分類考えられるが、今回は人数が集中した分類Ⅰ・分類Ⅲ・分類Ⅴの3分類で本調査用の質問紙を作成した。

表1 質問紙調査項目の基準

分類	Transparency	Familiarity
分類Ⅰ	高	高
分類Ⅱ	高	低
分類Ⅲ	低	低
分類Ⅳ	低	高
分類Ⅴ	中	高
分類Ⅵ	中	低

6.2 調査票のポイント

6.2.1 テストの特性

(i) 状況を日本語で提示し、前置詞(質問紙A)、副詞(質問紙B)、基本動詞(質問紙C)の3パターン同じ設問の質問を用意し、選択部分が違うものを用意した。以下は調査票例である。

《状況》：他人を軽蔑することを決してしない友人
にふれる場面で。

(A) He never looks down (1. to 2. for 3. with 4. on) others.

(B) He never looks (1. down 2. out 3. away 4. back) on others.

(C) He never (1. comes 2. goes 3. looks 4. turns) down on others.

¹ (5)に関しては、「形が違えば意味も違う」(Bolinger, 1977)を踏まえ、respect～と同義とされる look up to～でも、以下のように場面に応じた使い分けがある。

(a) That kind man respects everyone he meets.

(b) ?? That kind man looks up to everyone he meets.

(c) “Respect the child. Talk to him, he is smart, right?”

(d) ?? “Look up to the child. Talk to him, he is smart, right?”

(ii) 予備調査の結果から、以下の3分類でそれぞれ、10題ずつ、問題を出題した。

- ① 連想しやすく、見たことがある(表1の分類Ⅰ)
- ② 連想しにくく見たことがない(表1の分類Ⅲ)
- ③ 連想しにくいともしやすいとも言えず、見たことがある(表1の分類Ⅴ)

6.2.2 インフォーマント(被験者)特性

(i) 男女別割合

計304名の被験者のうち、男性が192名(63.16%)、女性が112名(36.84%)であった。

(ii) 学年割合

計304名の被験者のうち、1年生が123名(40.59%)、2年生が70名(23.10%)、3年生が74名(24.42%)、4年生が36名(11.88%) (無回答1名) であった。

(iii) 海外在住経験の有無

海外在住経験のあった者は、65名(21.38%)であり、在住期間は以下の表2のようになった。

表2 海外在住期間のまとめ

海外在住期間	n	%
1年未満(1)	25	38.46%
1年~1年11ヶ月(2)	4	6.15%
2年~4年11ヶ月(3)	23	35.38%
5年~9年11ヶ月(4)	10	15.38%
10年以上(5)	3	4.62%
合計	65	

(iv) 句動詞に関する質問

三語句動詞に関する質問で、「前置詞は苦手」とした人は全体の52.63%であり、句動詞の学習方法に関して、「丸暗記」をした人は71.05%であった。

6.3 調査結果概要

6.3.1 三語句動詞選択における調査紙間での比較

同内容の質問紙を選択部分に応じて、A(前置詞),B(副詞),C(動詞)それぞれに関して、3種類の質問紙を用意し、質問紙間での有意な差が見られるかを調べるために、一元配置の分散分析を行った。なお、被験者は、大学生(学部生)の同一授業の学生を対象とし、等質であることを仮定している。一元配置の分散分析により、 $F(2,301)=4.237, p<.05$ となることが分かり、質問紙間の平均値差に有意な差があることがわかった。具体的にどの水準間に有意差があるかを調べるために、多重比較(multiple comparisons)を行った。Student-Newman-Keuls法による多重比較を行うと、AとCが同質で、Bとは有意に異なるという結果が見られた。つまり、難易度では、B(副詞の選択)が易しく、A(前置詞)とC(動詞)がBと比べて難しいことが分かった。

表3 前置詞、副詞、動詞選択における質問紙間の比較

グループ	被験者数	平均	標準偏差
A 前置詞選択	119	14.79	4.061
B 副詞選択	95	16.48	4.363
C 動詞選択	90	15.13	4.772
分散分析の結果		$F(2,301)=4.237, p<.05$	
シェフェの多重比較の結果		A<B	
SNKの多重比較		A=C<B	

6.3.2 海外在住経験の有無による得点の比較

海外在住経験の有無によって有意差が出るか t 検定を行ったところ、どの質問紙にも有意差が見られず、三語句動詞の習得には、海外在住経験の有無は大きく関連しているとは言えず、英語に触れているだけでは三語句動詞の習得は困難であることがわかった。

表4 海外経験の有無によるIdiom scoreの比較

質問紙	海外経験	平均	標準偏差	n	有意確率
A	有	17.24	3.688	25	有意差なし
A	無	14.14	3.953	94	
B	有	16.90	3.919	20	有意差なし
B	無	16.37	4.493	75	
C	有	15.75	4.241	20	有意差なし
C	無	14.96	4.927	70	
全体		15.89	4.204	304	

6.3.3 イディオムスコアに影響を与えている因子

英語の得意度、イディオム学習の得意度、学年、「丸暗記」の学習法のそれぞれの項目が、今回の調査紙における30題からなるイディオム得点(Idiom Score)を有意に予測するかどうかを検討するために、重回帰分析を行った($R^2=0.241$)。その結果、英語の得意度($\beta=0.305, p<0.001$)もイディオムの得意度($\beta=0.173, p<0.01$)も「丸暗記」学習方略($\beta=0.111, p<0.05$)も学年($\beta=-0.132, p=0.05$)もそれぞれ、有意な予測変数となった。特筆すべき点として、学年は β の値がマイナスになっており、0.5パーセントレベルで有意であるため、学年が上がるにつれて、成績が下がっていくことを有意に予測している。

表5 Idiom Score を予測する重回帰分析

変数名	満点	平均	標準偏差	β	t値	
予測変数 (従属変数)						
Idiom Score	30	15.42	4.42			
説明変数 (独立変数)						
英語の得意度	5	2.83	1.1	0.305	4.79	***
イディオムの得意度	5	2.62	1.075	0.173	2.725	*
学習方略 (丸暗記)	1	0.71	0.454	0.111	2.15	**
学年	6	2.07	1.065	-0.132	-2.553	**

注1:n=304. * $p<0.01$. ** $p<0.05$. *** $p<0.001$.

注2:決定係数(R^2)は、.241であった。

6.3.4 分類による有意差分析

4.1.1.(2)で示した分類①～③間で得点率の差があるか t 検定を行ったところ、それぞれの質問紙でも有意差があることがわかり、①が最も易しく、②が最も難しく、訳語との対応度や経験度が得点率に大きな影響を与えていることがわかった。

6.3.5 独立性の検定による難易度分析

6.3.5.1 全ての選択で正答率の低いもの

前置詞・副詞・動詞選択でどれも正答率が低く、正答率に有意差が見られなかったものとして、以下のものが挙げられる。連想度や経験度も低いことから、抽象度が高く学習者には見慣れない句動詞を理解することは困難であったことがわかる。

表6 前置詞・副詞・動詞選択全てで正答率の低いもの

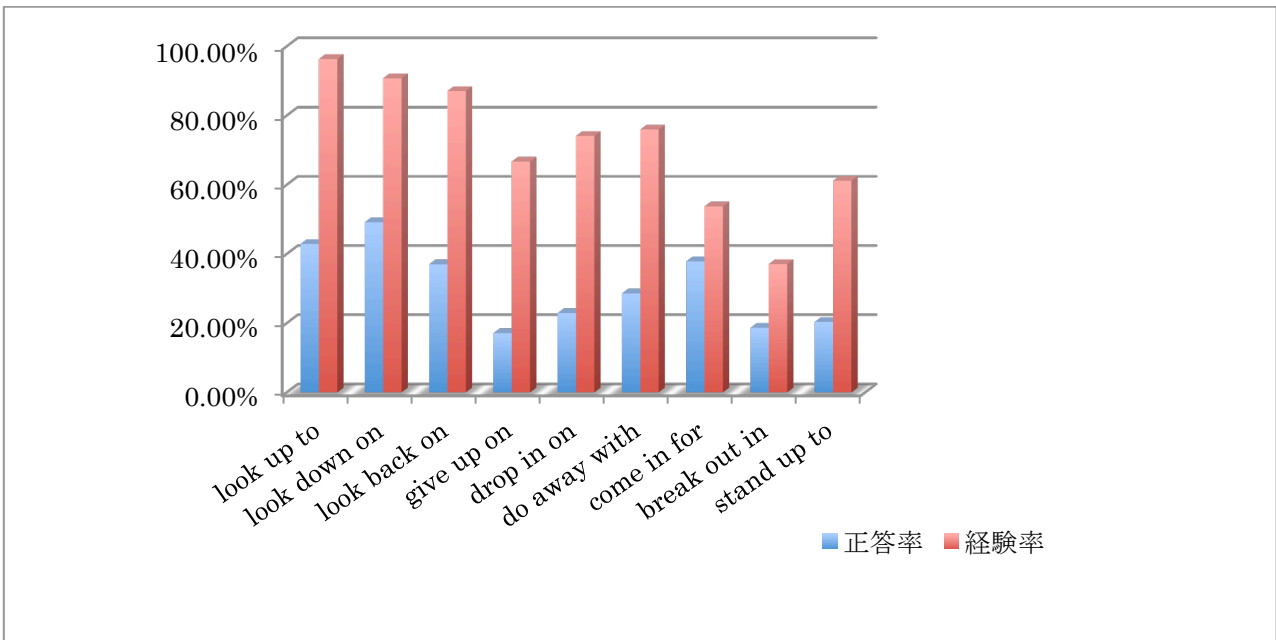
質問	質問文	問題文の訳語	経験率	連想度	動詞正答率	副詞正答率	前置詞正答率
8	I don't <u>go in for</u> fancy living.	～を好ま(ない)	48.15%	2.06	22.47%	25.00%	26.89%
9	We've <u>put in for</u> a grant to repair the building.	～を申請する	31.48%	2.48	26.97%	25.53%	16.81%
21	I <u>went back on</u> a promise to my parents and quit school.	～を裏切って	40.74%	2.57	20.45%	24.47%	33.90%

6.3.5.2 前置詞選択で困難を要するもの

前置詞選択で困難を要したもので、有意差の見られたものが以下の表8である。これらは経験率や連想度も比較的高いものが多いにも関わらず、正答率が低くなっている。つまり、前置詞選択においては、経験率や連想度に関わらず、正答が難しかったと言える。特に、設問6のtoをforと差異化できない誤答が目立った。

表7 前置詞選択で正答率の低いもの

質問	質問文	問題文の訳語	正答率	経験率	連想度
1	He never gives up <u>on</u> his students.	見捨て	17.09%	66.67%	3.81
3	He never looks down <u>on</u> others.	軽蔑する	49.15%	90.74%	5.04
6	He is looked up <u>to</u> as a great writer.	尊敬されて	42.86%	96.30%	4.81
13	We look back <u>on</u> those years as the best in our life.	振り返ってみる	36.97%	87.04%	4.87
19	I'm going to drop in <u>on</u> him tomorrow.	に立ち寄る	22.88%	74.07%	3.22
22	Every summer I break out <u>in</u> a rash.	湿疹ができる	18.64%	37.04%	2.81
23	This doesn't stand up <u>to</u> the other firm's product.	～に対抗	20.34%	61.11%	4.02
26	Australia did away <u>with</u> the death penalty.	を廃止した	28.57%	75.93%	3.54
29	A lady came in <u>for</u> a consultation.	しに来た	37.82%	53.70%	3.69

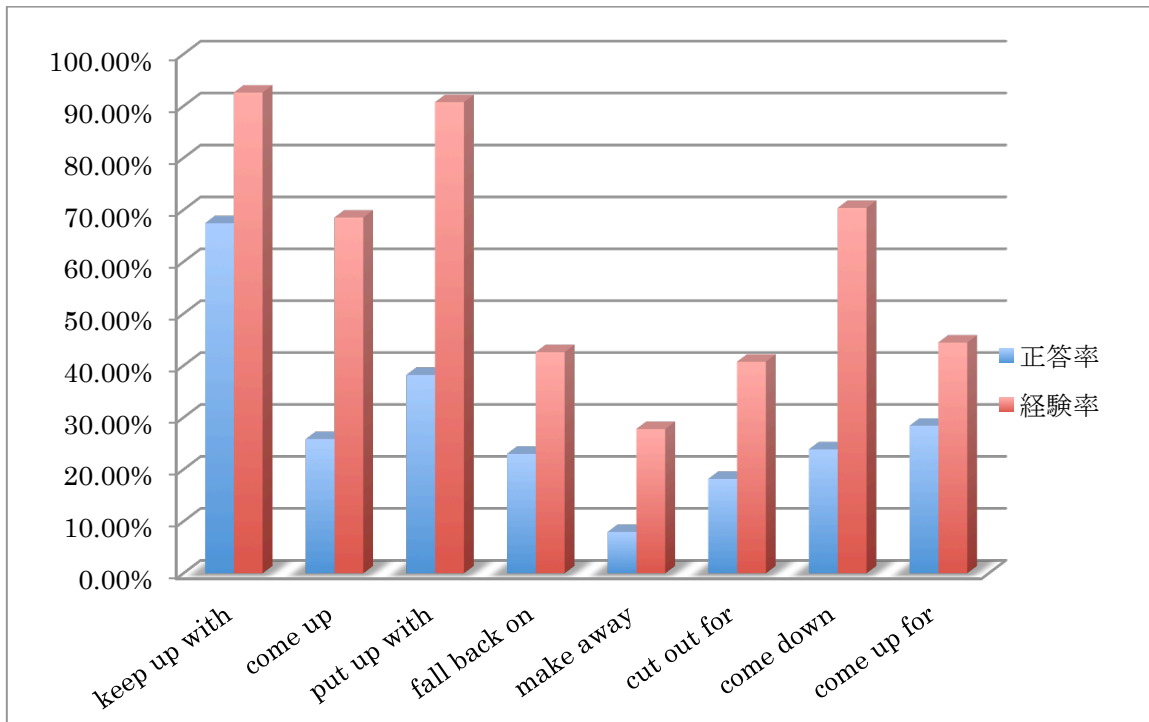


6.3.5.3 動詞選択で困難を要するもの

動詞選択においても、前置詞選択と同様の傾向が見られ、経験率や連想度が高くても正答が困難であったものが多い。特に設問5の keep と put を差異化できずに誤答した者が目立った。

表8 動詞選択で正答率の低いもの

質問	質問文	問題文の訳語	正答率	経験率	連想度
5	We have to <u>keep</u> up with the changes in technology.	遅れずについていく	67.42%	92.59%	4.65
10	He didn't have enough time to <u>come</u> up with the material itself.	を用意する	25.84%	68.52%	3.06
12	I cannot <u>put</u> up with your behavior any longer.	耐え	38.20%	90.74%	3.13
14	I have some savings to <u>fall</u> back on.	当てにできる	22.99%	42.59%	2.93
20	The man <u>made</u> away with my bag.	を持ち去った	7.95%	27.78%	2.56
24	He isn't <u>cut</u> out for teaching.	には向いて	18.18%	40.74%	2.06
25	She <u>came</u> down with flu.	にかかってしまった	23.86%	70.37%	3.02
28	He cannot <u>come</u> up for re-election next time.	立候補	28.41%	44.44%	2.89



6.5.3.4 英語力による分析結果

英語レベルを以下の表のように設定し、レベルが高い順にレベルⅠ、Ⅱ、Ⅲに分類した。

表 英語レベルの設定基準

レベル	TOEIC	TOEFL(PBT)	TOEFL(CBT)	TOEFL(iBT)	IELTS	英検
レベルⅠ(上)	730以上	550以上	213以上	81以上	6以上	1級～準1級
レベルⅡ(中)	475以上	460以上	140以上	48以上	4.5以上	2級
レベルⅢ(下)	475以下	460以下	140以下	48以下	4.5以下	3級以下

レベルによってイディオムスコアに有意差が出るかを、一元配置の分散分析および、多重比較を行ったところ、以下の表のような結果になった。質問紙A(前置詞選択)ではレベルによる有意差が見られたが、B(副詞選択)、C(動詞選択)においては見られなかった。なお、全体の正答率(A,B,C)を総合したところ、レベルによって有意差があることが分かった。

表 英語力による有意差分析結果

質問紙	F値	有意確率
A	$F(2,6.423)$	$p<.01$
B	$F(2,2.344)$	有意差なし
C	$F(2,1.676)$	有意差なし
全体	$F(2,10.425)$	$p<.001$

有意差がどの変数間で見られたかを明らかにするために、多重比較を行った結果が以下の表のようになる。上位者・中位者の間には有意差はないが、下位者との間には有意差が見られた。

表 英語力による平均値の比較

質問紙	英語力	平均(30点満点)	難易度	多重比較
A	レベル I	17.58		IとIIの間には有意差なし
A	レベル II	17.10	3<2<1	IとIIIの間は $p<.05$ で有意
A	レベル III	14.36		IIとIIIの間は $p<.05$ で有意
B	レベル I	18.20		
B	レベル II	17.74	3<2=1	全て有意差なし
B	レベル III	16.00		
C	レベル I	17.83		
C	レベル II	15.82	3<2<1	全て有意差なし
C	レベル III	15.08		
全体	レベル I	17.90		IとIIの間には有意差なし
全体	レベル II	17.11	3<2<1	IとIIIの間には $p<.001$ で有意
全体	レベル III	15.07		IIとIIIの間は $p<.05$ で有意

つまり、英語力が高い上位者であっても、三語句動詞の習得が突出して高いわけではなく、誤答してしまう項目も多く見られることがわかった。

6.3.5.5 習得調査結果考察

6.3.5.5.1 類義語の差異化

日本語訳を当てた学習法では類義語を「使い分けつつ、使い切る」ことができないことが本研究で明らかになった。特に学習者の解答が分かれたものとして以下の四点の項目が挙げられる。

- (1) to と for
- (2) over と through (get through with～の設問で)
- (3) keep と put (put up with～の設問で)
- (4) set と put (put in for～の設問で)

特に誤答が目立った(1)に関して、具体的に正答率を比較すると以下ようになる。

設問番号	日本語訳	句動詞	toの選択率	forの選択率	分類
2	～を受けている	come in for	50.43%	19.66%	未知
6	～として尊敬されている	look up to	42.86%	31.93%	既知
7	～のために立ち上がる	stand up for	11.76%	70.59%	既知
8	～を好む	go in for	20.17%	26.89%	未知
9	～を申請する	put in for	41.18%	16.81%	未知
17	～に負ける	give in to	41.53%	20.34%	未知
23	～に対抗する	stand up to	20.34%	34.75%	既知
24	～には向いて	cut out for	12.71%	47.46%	未知
28	立候補	come up for	31.09%	38.66%	未知
29	しに来た	come in for	31.93%	37.82%	既知
30	～の面倒を見る	look out for	3.36%	63.87%	既知

6.3.6 考察

6.3.6.1 本研究の要約

本研究では認知意味論的アプローチに基づき、英語における三語句動詞の意味形成原理、習得論、教授法などへの示唆等を中心に議論を展開してきた。特に中心的に議論を行った三語句動詞の習得論に関する研究に関しては、以下の五点をリサーチクエッションに立てた。

- (1) 学習者は、三語句動詞をどのように学習しており、学習方法が習得に影響を与えているだろうか。習得率に影響を与えている学習者変数は何であろうか。
- (2) 三語句動詞において、学習者が学習の際に困難を要する部分（動詞、副詞、前置詞）は何か。
- (3) 意味の透明性(transparency)と学習経験度(familiarity)は習得率に影響を与えているだろうか。
- (4) 海外在住経験の有無による習得率に差があるだろうか。
- (5) 英語レベルによって習得率に差はあるだろうか。

まず、(1)に関して、習得率に影響を与えている学習者変数は、「英語の得意度」、「イディオムの得意度」、「学習方略（丸暗記）」「学年」であった。特筆すべき点として、「丸暗記」の学習を行った学習者は全体で七割を超え、こうした学習方略をとった者のイディオムスコアは有意に低く、丸暗記といった学習方略が三語句動詞の習得において習得を促していないといえる。さらに、学年が上がるにつれてイディオムスコアが有意に下がることから、「丸暗記」という学習方法を取った結果、「丸暗記」は習得を促さないため、受験期に覚えた学生は学年が下の場合は、その勉強で覚えていることが多いため正答率が高いが、受験勉強の影響が薄れてきた学年になると丸暗記したものは忘れやすいため、正答率が低くなったと推測できる。

(2)に関しては、特に、前置詞と基本動詞の選択において課題が多く見られた。副詞選択に関しては、学習者がイメージしやすいものも多かったが、前置詞や基本動詞の選択においては、学習者のイメージのしづらい意味の抽象化がおきやすく困難な点が多かったと推測される。こうした習得が困難な背景を勘案すると、語のコアを用いた学習は、特に前置詞や基本動詞に関して、集中して意識的に学習していく必要があるだろう。

(3)に関しては、日本語訳から連想しにくい三語句動詞ほど習得が困難であるということは仮説通りであった。その一方で、経験度が高い三語句動詞に関しては、どれも正答率が良いことが予想されたが、なかには習得が困難で誤答が目立ったものも見られた。正答率に関しても、特に、前置詞・動詞選択における誤答が多く、語の選択に関して、学習者が本質的な理解に基づいて語を選択することがされていないため、経験率があっても誤答してしまうと考えられる。それゆえ、教師は、特に前置詞や基本動詞の指導にあたっては、誤答しやすいものをふまえて、意識的に指導していく必要がある。本論文では、学習者の誤答しやすい語に関して、前置詞・副詞・基本動詞に分けて抽出し、説明可能性を、コア理論を利用して徹底して追求した。ここでの議論をふまえ、今後、学習者に教室内でどのような教授法で提示を行い、どのようなエクササイズが考えられ得るかを考察し、その効果をどのように検証していくかは今後の課題である。

(4)に関しては、前置詞・副詞・基本動詞選択ともに、海外経験の有無による正答率の有意差は見られなかった。つまり、海外経験があったとしても、習得に困難を要するものも多かったことがわかる。なお、海外長期経験者(5年以上)および海外短期経験者、海外長期経験者と海外経験無しの者の間の正答率に関しては、前置詞の選択において有意差は見られたが、副詞・動詞選択には有意差は見られなかった。習得に困難を要した三語句動詞も海外経験の有無によって差は見られなかった。

最後に(5)に関しては、副詞選択に関しては英語レベルによる有意差は見られなかった。一方で、前置詞選択・動詞選択に関しては、英語レベルが上位・中位者間においては有意差は見られなかったが、下位者との間には有意差が見られた。このように習得率に関しては、確かに、英語が苦手な者にとっては低いことは想定されるが、英語が得意であっても突出して習得率が高いとは言えず、高い英語力を持った者であっても、三語句動詞の本質的な理解に至っていない点も多く見受けられた。

6.3.6.2 今後の研究課題

本論文では、三語句動詞の構成原理を明らかにし、その習得は日本人学習者にとって難しいということを示した。ここで得られた知見をどう活かすかを考えるにあたり、今後さらに研究すべき課題がある。

6.3.6.2.1 指導に応用可能な言語分析

その一つは英語教育に活かすための言語分析の必要性である。句動詞を効果的に教授していく方法として、(1) 句動詞に関する様々な個別具体的な用例を生徒に多く提示していきながら、生徒自らが抽象化し、語のコアや意味形成原理に気づかせる帰納的な教授法、および、(2) コアに基づいたなるべく訳語を用いない解説を工夫し、用例に触れさせながらコアの視点からの説明を加え、そこから句動詞にまで応用させていく演繹的な教授法、の二つが考えられる。コアに基づいた指導の批判の対象として、多くの用例に触れていれば習得を促せるのではないかという点である。ここでの批判的論点が正しければ、(1)の教授法で有効に句動詞を指導することができるということになる。すなわち、たくさんのインプットを提供すれば、自然と句動詞の使い方を学習するという考え方である。しかし、本研究で明らかのように、長期間に亘り、英語圏で生活をしてきた者にとっても三語句動詞の習得は容易ではない。すなわち、英語に触れるだけではその習得は

できないということである。そこで、三語句動詞の意味と表現の関係を英語感覚的に学ぶ必要があるが、その際に最も有力なのがコア理論に基づく指導である。そのためには、分かる英語指導のための言語分析が必要である。試案は資料1で示したが、その一例を以下に示す。

《言語分析の事例》

三語句動詞の空間詞が果たす役割は以下のように記述できる。

三語句動詞：動詞＋【空間詞1(副詞)】＋【空間詞2(前置詞)】

二つの空間詞は以下のように意味役割が決定されていると想定可能である。

【空間詞1】

- [1] 動詞の動作の方向性や位置関係を明示
- [2] 動詞の動作性を強調したり、結果状態に焦点のあるもの

【空間詞2】

- [1] 動作性を説明したり、動作の対象や目的対象を明示
- [2] (結果)状態に焦点があるもの

例えば、V+in forに関しては、put in for～(～を申請する)、go in for～(～を好む、参加する)、come in for～(～を受ける)など、非常に多義性の高い表現である。一見、バラバラに見えるこれらの表現もコアの図式融合の理論を用いて、説明が可能である。まず、in と for のコアは以下の通りである。

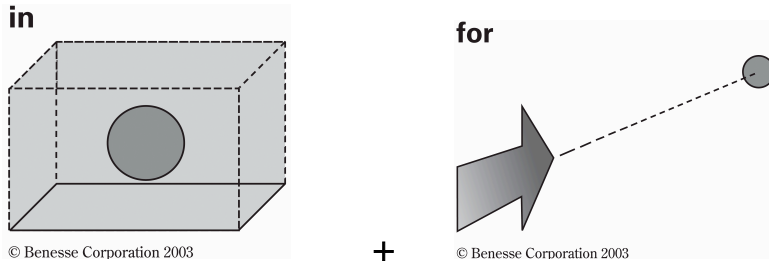


表 4.1 in と for のコア図式融合のイメージ図式

〈空間内に〉をコアとする in と対象を指差して〈何かに向かって〉をコアとする for を図式融合させると以下のような意味が創出される。

【コアの図式融合と意味形成原理を利用した三語句動詞理解のための記述例】

V+in for～：

- ① 何かに向かって中に入る変化や動きを示す
 - [+積極性]：参加する、支持する、立候補する
 - [+受動性]：～を受ける
- ② 何かに向かって中に入っている状態を示す

in と for のコアのどの部分に焦点が当たるかによって多義性が生じている。例えば、以下の(a),(b)の場合は〈何かの対象を指差して〉の for と〈中に入る〉という動作性に焦点が当たった in が結合した形である。

- (a) He wants me to come in for an interview on Tuesday.
(火曜日の面談のために、彼は私が来る事を望んでいる)

(a)に関しては、in を付加することによって、come という動詞に〈外から中に入っていく〉という動作性を伴わせている。動作性を強調するものとして、以下のような例もある。

- (b) We went in for the tournament.
(私たちはトーナメントに参加した)

上記(b)に関しては、辞書には、go in for～で、「～に参加する」の語義として記載があるが、これも、〈トーナメントに向かってその空間内に入っていく〉という目的地点である〈トーナメント〉を指差してそれに

向かっていく動作性を強調した表現である。類例として、以下の(c)のように、動詞が変わっても同じ系統の意味を有することがわかる。

- (c) He put himself in for the decathlon.
(彼は十種競技に参加した)

これらとの関連で、以下のような用例にも用いる事が可能である。for の〈対象を指差し〉て、in の〈積極的にある行動に向かって入って行く〉という動作性が強調されると、以下の(d),(e),(f)のように、「～を支持する」や「立候補する」といった意味合いでも用いられる。

- (d) We go in for all the postage reduction.
(全ての郵税引き下げを支持する)
(e) He is going in for the election.
(彼はその選挙に立候補する)
(f) I'd like to put in for a raise.
(私は昇給を願い出た)

一方で、前置詞の対象の性質によっては、(g),(h),(i)の例のように、主体の意図に関わらず、〈何かの好ましくない状況に向かって入って行ってしまった〉こともある。

- (g) He came in for a good deal of criticism.
(彼は多くの批判を受けた)
(h) You really let me in for a tough time.
(君は本当に私をひどい目にあわせてくれたねえ)
(i) I realized I had let myself in for a terrible evening.
(私はひどい夜に自分が巻き込まれたことを悟った)

もちろん、受動性には、(j)のように、必ずしも悪い事ばかりではない。

- (j) Henry came in for a large share of his father's fortune.
(ヘンリーは父の財産の分け前にあった)

以上までは、in が〈何かの中に入って行く動作〉を表現していることを述べてきたが、in が〈何かの空間内にある状態〉を焦点化すると、〈何かの対象を指差して、何かのなかに入っている状態〉を示し、以下の(k),(l)のような用例が生まれる。

- (k) I don't go in for loud popular music.
(私はうるさいポップミュージックが好きではない)
(l) He goes in for teaching English.
(彼は英語を教える事を職業としている)

〈何かに向かって中に入っている状態〉は趣味であれば、(k)のように「～を好き」になるし、職業であれば、(l)のように、「～を職としている」の意味になる。

このように、多義性の発生しやすい三語句動詞においても、三語句動詞の原理に基づいて、コアの図式融合の理論を用いると、丸暗記に頼ることなく、容易に理解可能であることがわかる。

6.3.6.2.2 言語使用実態と指導法およびその効果

上記の言語分析と併せて必要なのは言語使用の実態を明らかにすることである。中でも、英語母語話者は三語句動詞と意味的に関連した動詞をどのように習得し、それぞれをどのように差別化しているかを明らかにする必要がある。例えば、put up with～は、put も up も with も基本語である。一方で、put up with～は、前述したように、stand, bear, endure, tolerate といった他の難易度の高い動詞にも言い換えることができる。発達段階に応じて、三語句動詞からこうした難易度の高い他の動詞表現にどのように獲得していくのか。endure や tolerate といった表現を使う必要がある場面や状況が発達段階に応じて出て来た時に、put up with～ではなく、endure を選択する、などといった「使い分け」がなされるのであろうか。事実、句動詞は口語

で多く用いられるという指摘がなされており(Biber(eds.),1999 他)、その使用実態を関連動詞との関係において調査する必要がある。そうすることで、三語句動詞の指導に際して、適切な文脈を提供し、意味的に関連した動詞との違いを対照的に示すことができるからである。

さらに、コア理論に基づく指導を学校現場で行う場合、どの段階でコアを用いた説明をするのが有効か、コア図式融合の考えをどういう形で提示すれば効果的か、などの指導法に関する効果研究が今後の課題となる。このことと関連して、新しいメディアを使った教育の可能性も研究していく可能性もあろう。言葉による説明は抽象的になりがちであるが、視覚情報は学習者にとって直観的に理解し、英語感覚を身につけるのに有効だと考えられるからである。

いずれにせよ、コアを図式融合させて学ぶ方法への教師の働きかけはどこかの段階で必要不可欠となる。なぜなら、学習者による抽象化は、どこかで破綻していることも多いからである。すなわち、上記であげた(1) 句動詞に関する様々な個別具体的な用例を生徒に多く提示していきながら、生徒自らが抽象化し、語のコアや意味形成原理に気づかせる帰納的な教授法、および、(2) コアに基づいたなるべく訳語を用いない解説を工夫し、用例に触れさせながらコアの視点からの説明を加え、そこから句動詞にまで応用させていく演繹的な教授法、の(1)か(2)かの二者択一的な議論は妥当ではなく、(1)と(2)を融合させた形での指導が最も望ましいと思われる。学習者の「気づき」に主眼をおくことを中心に、それを契機に「気づきから理解へ」といったプロセスが重要であり、それを促す役割にあるのが英語教師の使命である。

7 参考文献

Bolinger, D. (1971) *The phrasal verb in English*.

Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press

Bolinger, D. (1977) *Meaning and form*. London :Longman.

Fraser, B. (1976) *The verb-Particle Combination in English*. The Hague: Mouton.

田中茂範 (1987) 『基本動詞の意味論-コアとプロトタイプ-』, 三友社出版.

田中茂範, 川出才紀 (1989) 『動詞がわかれば英語がわかる』, ジャパンタイムズ.

田中茂範・武田修一・川出才紀 (編著) (2003) 『E ゲイト英和辞典』, ベネッセコーポレーション.

Langacker, R. (2005). *Construction Grammars*

:cognitive, radical, and less so *Cognitive Linguistics Research* 32 :103-159.

田中茂範, 佐藤芳明, 阿部一 (2006) 『英語感覚が身

につく実践的指導』, 大修館書店.